

中古仮名文における漢文訓読語「ごとし」の意味用法について

森脇, 茂秀
別府大学助教授

<https://doi.org/10.15017/8901>

出版情報 : 語文研究. 100/101, pp.1-14, 2006-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

中古仮名文における漢文訓読語「ごとし」の意味用法について

森 脇 茂 秀

一、中古仮名文における「ごとし」の問題の所在

「ごとし」は、「助動詞」か或いは「形式」形容詞^(注1)か、といった品詞論的な問題は存するものの、「用例の偏在」という文体的な事実、即ち、漢文訓読に用いられる所謂「漢文訓読語」であるといふことは、ここで改めて指摘するまでもなく周知の事実であり、異論の余地はないと考えられる。「ごとし」についての、詳細な考察については、築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』(一九六三)を欠くことができない^(注2)。

博士は、同書で次のように指摘している(以下、波線 傍線は稿者)。

周知の如く、訓読語「ごとし」に和文語「やうなり」が對立するやうに説かれてゐる。大綱より言へば、異論は無いのであるが、少し詳細に見ると、二三問題がある。先づ、和文一般には「ごとし」が無いといふが、それは皆無なのではなく、殊に語幹の用法「ごと」などは、連用修飾格などとして相當多數の例が認められる源氏物語では大成本の索引によると三九例ある。又「ごとく」「ごとき」なども源氏物語に類例あり、それらは學者や公達などの會話の中に多いとは言つても、とにかく用ゐられてはゐる。これは「く」語法や「み」語法、「けむ」などが源氏物語の散文の部分に全く見えないのと比べると、互に異質的なものとせざるを得ない。結局、「ごとし」は所謂訓読語とは言つても、訓読語の中では

相當に日常語に近い類であつたと見るべきで、土左・宇津保・竹取・古今假名序、その他少しでも訓讀語的要素を含んだ文献には、等しく「ことし」が見えることも考へ合はすべきであると思ふ(尤も、この意味の語の使用回数が多いことも、勿論、考ふべきことではある)。

「ことし」の訓讀の例は今更擧げるにも及ばぬと思ふ。和歌にも次掲の如く多くの例があるわけだが、これは必ずしも和歌のみの特徴(又は和歌と訓讀の共有する特徴)とは言ひ切れまいと思ふのである。(略)

右に見るやうに、殊に「わがことく」といふ慣用句のやうなものが多い。又この他に、續日本紀の歌や佛教歌謡には「ことし」が相當多く用ゐられてゐることも注意すべきである。

一方、訓讀の方を見ると、「ことし」は廣く用ゐられ、和文の「やうなり」は全く用ゐない(この點も實は和歌と同じであるが)。しかし、終止形「ことし」を頻用する(源氏では白氏文集の訓讀文の引用で一例のみ)ほか、「ことくへなり」「ことくへあり」「ことくけむ」などの形があるのに、和歌ではこれらの形が無い。この點からすると、やはり訓讀と和歌とでは用法の點で一致しないと見ざるを得ぬことになる。

博士は、詳細な考察の結果、「ことし」を「訓點語とはいつても」日常語に近い類」と「慎重に」指摘しておられる。

同書の後、辞書類、例えば、『日本文法大辞典』(一九七二)には、「略」平安時代においても終止形「ことし」は強い表現で、男子専用語的であつた。「ことし」は形容詞ク活用的活用をするが、しかし音便形はない。他の形容詞や助動詞には音便形をみるのに、「ことし」に限って「ことつ」「ことこ」などの形がないのは目だつ特色である。平安時代の訓點語では「たとへば……の「ことし」と訓讀する慣用表現が多い。

「ことし」は奈良時代の口語から平安時代に男性語として訓點語に移り、奈良時代は体言に直接つく形であつたが、平安時代には助詞を介してつく形式に変わつて行つた。(略)と指摘する。さらに、比較的最近出版された『日本語文法大辞典』(二〇〇一)では、「平安時代においては「ことし」は主として漢文訓讀文に用いられ(但し語幹用法)「こと」はむしろ和文専用であつた)、和文系でこれに対応する比況の助動詞としては「やうなり」が用いられていた。『源氏物語』などにも「ことし」が用いられてはいるが、「やうなり」に比して少数であり、会話文における使用者は男性に限られている。これは漢文訓讀系の用語が男性の日常語の中に取り入れられていたことを物語る。」と指摘し、「ことし」の文体論

的な性格について、更に簡潔に纏めて記述されているのである。

また更に、三省堂『大辞林』（一九九五）「ことし」には、「中古には、漢文訓読文系列の文章に多く用いられ、和文に多く用いられる「やうなり」と対照的な特色を示した。なお、中古の和文でも、男性の書いたものには「ことし」も用いられた。」とあり、「男性専用語」から、中古和文でも「男性の書いたもの」とまで拡大した記述がある。

これらの、一般的なものを含めて、辞書の記述には、「ことし」が、漢文訓読語であり、しかも会話文における使用者が男性であることを承けて、「男性の日常語」であると規定し、この指摘は、もはや定説化した感があるといっても差し支えないのではないかと考えられる。

しかし、会話文における「ことし」の使用者が、仮に男性に限られているからといって、当時の「男性の日常語」の中に「ことし」が取り入れられていた、と直截的に結びつけて考えて良いのであろうか、という疑問点が、依然として残っているように思う。

そこで本稿においては、中古和文に表れた漢文訓読語「ことし」の意味用法を考察することによって、その語性を明らかにすることを目的としたい、と思う。

以下、作品毎に「ことし」を考察することとする。

二一、伊勢物語、大和物語中の「ことし」

「伊勢物語」中には「ことし」の用例が、2例（「ことく」1例、「ことき」1例）存する。

(1) むかし、田舎わたらひしける人の子ども、井のもとに出でてあそびけるを、大人になりにければ、をとこも女も恥ぢかはしてありけれど、をとこはこの女をこそ得めと思ふ。女はこのをとこをと思ひつゝ、親のあはすれども、聞かでないありける。さて、この隣のをとこのもとよりかくな。

筒井つの井筒にかけしまるがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに

女、返し、

くらべこし振分髪も肩すぎぬ君ならずして誰かあくべきなどいひくゝて、つひに本意のごとくあひにけり。

（伊勢物語 二十三段 一二六頁）

(2) むかし、そこにはありと聞けど、消息をだにいふべくもあらぬ女のあたりを思ひける。

目には見て手にはとられぬ月のうちの桂のごとき君にぞあ

りける

(伊勢物語 七十三段 一五三頁)

(3) 「ふねも往ぬまかぢもみえし今日よりはつき世の中をいかでわたらむ

と申せ」といひければ、男にいひければ、物かきふるひ去にし男なむ、しながら運びかへして、もとのことくあからめもせて添ひみにける。
(大和物語 一五七段)

(1) は、幼な恋の成就の場面で、「歌をかわしつづけて、しまいに、もとからの願いとおり(念願通り)結婚した」という場面である。この「ことし」は、「地の文」に用いられており、「漢文訓読」的な文脈の必然性は感じられない。また、「あひにけり」という主体は、「男と女」であって、男性のみを特に強調したとも考えられない。

(2) は、昔、そこにはいると聞くが、たよりさえすることができない女のことを思い、「男」が詠んだ和歌の中に「ことし」が用いられている。使用者は確かに「男性」で、しかも「目には見えていながら手には取ることができない、月中の桂の樹のようなあなたなのですね」と解釈できよう。⁽¹⁰⁾この「ことし」の使用者は男性であるが、「桂のごとき」が修飾する「君」は明らかに女性であるから、漢文訓読語を使用することによって、後述する「源氏物語」のように、漢文

訓読語を用いることで、文脈により「厳つい」といった意味を含有している等とは、ここでは考えられないであろう。

(3) は、「大和物語」の用例で、別の女性のもとに去っていった男に対して、女が、つらい世の中をどのように過ごしたらよいでしょうかという歌をしいの童を介して男にいったところ、「そのままそっくり」運び返して、元の鞆に収まった、という場面に「ことし」が用いられている。

このように、中古初期の物語作品においては、「ことし」の比較対象となるべきものは(1)「本意」(3)「もと」となっており、有るべき対象が現前と存するもの、(2)のように現実の世界には存しない、架空の世界のものであるが、両者共に比較対象となるべきものの指し示す事柄が「具体的」であるといえよう。また、「ことし」は、「地の文」と「和歌」に表れていることも併せて指摘しておきたい。

二二二、土左日記、蜻蛉日記、枕冊子中の「ことし」

漢文訓読との関係において早くから注目されてきた「土左日記」には、「ことし」の用例が、1例(1)「ことし」終止形(「ことくなり」)(2)「ことく」(3)「ことく」(4)「ことく」の4例存する。

(4) 四日。かぜふけば、えいでたらず。まきつら、さけ、よきものたてまつれり。このかうやつにももてくるむじなほしもえあらで、いさくけわざせさす。ものもなじ。にぎはしきやつなれど、負くるこゝちす。

五日。かぜなみやまねば、なほおなじところあり。ひとくたえずとぶらひにく。

六日。きのふのことし。(土左日記 一月六日 三三頁)

(4) は浦戸湾から太平洋に出た途端波風に遮られ、大湊に泊まっている場面であり、「風波がやまない」ので、同じところにいるのは、昨日と同様である「と解釈できる。この「ことし」には、小学館『日本古典文学全集』の頭注に「漢文訓読語。和文では、「やうなり」というのが普通である。」とする指摘がある。この指摘自体は、的を射たものであるが、ここでも漢文訓読語が表れなければならない必然性は感じられない。ここでの「ことし」の上接語は、より具体的な「きのふ」で、「文章語」的場面であることを指摘しておく。

また、「土左日記」には「ことへなり」「ことへく」の用例が、4例存する。

(5) 二月一日。あしたのま、あめふる。むまときばかり

にやみぬれば、和泉の灘といふところよりいでてきゆく。うみのうへ、きのふのことし(土左日記) かぜなみみえず。黒崎のまつばらを入れてゆく。ところのなはくるく、まつのいろはあをく、磯のなみはゆきのことし(土左日記) かひのいろは蘇芳に、五色にいまひといるぞたらぬ。このあひだに、けふははこのうらといふところより綱手(土左日記) ひきてゆく。

(6) 十七日。くもれるくもなくなりて、曉月夜いともおもしろければ、ふねをいだしてきゆく。このあひだに、くものうへもつみのそこも、おなじことになんありける。むへもむかしのをどは、「さをは穿(う)が(う)つ、なみのうへのつきを。ふねはおそふつみのうちのそらを。」とはいひけん。きくされにきけるなり。(土左日記 一月十七日 四〇頁)

(7) 今し、はねといふところにきぬ。わかきわらは、このところのなをきつて、「羽根といふところは、とりのはねのやうにやある。」といふ。まだをさなきわらはのこと(言)言なれば、ひとくわらふとき、ありけるをんなわらははなこのうたをよめる。

まことにて各にきくところはねならばとぶがことく(土左日記)にみやこへもがな

とぞいへる。をとこもをんなも、いかで、とく京へもがなと

おもふことゝあらば、このうたよしにはあらねど、げにとおもひて、ひとぐわすれず。

(土佐日記 一月十一日 三七頁)

(5)(6)の「ことく」には、『日本古典文学全集』頭注に「漢文訓読語。和文では「やうに」という。「との指摘がある。同書は「こと」と「ことくなり」(「ことく」)との語性を恐らく同一視しているのである」と考えられる。確かに(5a)は、比較対象が(4)「こと」と同じく「きのふ」であり、(5b)は、具体的な「ゆき」となっている。また、時代が下って、『日葡辞書』にも、

Gotocu, gotokuni, kotok. または, kotokuni (如く。または 如くに) 副詞。…のよつに、あるいは…と同じよつに。

とあり、見出し語として「ことく」「ことく」と「ことく」と併記されていることを考えると「ことく」と同質であると考えたい理由は確かに存する。しかし、(7)は「ことく」に承接するものが、形容詞連体形「おなじ」となっている。中古仮名文学作品に表れる「ことく」は、必ず助詞を伴っており、直接活用語を承ける用法は存しないことを考えると、

中古和文中の「ことく」「ことく」には、承接上の差異が存する可能性がある。

また、(5)(6)の共通項として、「変体漢文の用語」である「このあひだに」が表れることを指摘できる。(5)には後続部に、漢文訓読語「いはく」が見られ、これらに導かれて「ことく」が表出したとする説も成り立つであろう。

(7)は、和歌中の「ことく」である。ここで歌を詠んだのは、「男」ではなく、「女童」即ち「女性」であり、この歌を書き記したのが、女性に仮託した男性である紀貫之だとしても、「男性特有語」と言い切れないことは、このことから明らかであろう。また、「今し」といった漢文訓読語も先行してはいるが、詠み手が「女童」であることから「訓読語の中では相當に日常語に近い類であつた」とする指摘と符合するように考えられるが、それ以外は、「地の文」に用いられており、「文章語」的側面を有していると考えられる。

『蜻蛉日記』には、「ことく」の用例が、1例(「ことく」終止形)、「ことくなり」(「ことく」のみ)が1例存する。

(8)五日の日は、司召とて、「大將に」など、いとゞさわきまさりて、いともめでたし。それより後ぞ、すこししばくみえたる。「この大せつゑに、院の御給はり申さん、幼き人

に冠せさせてん、十日の日」とさだめて、す。ことども、れいのごとし。ひきいれに、源氏の大納言、物したまへり。ことはてて、方ふたがりになれど、「夜ふけぬるを」とて、とまれり。かゝれども、こたみやかぎりならんと思ふごころになりたり。

(蜻蛉日記 天禄元年八月 二〇七頁)
(9) かくはあれど、たゞ今のごとくにては、ゆくすゑさへ心ぼそきに、たゞひとりをとこにてあれば、とじごころもごかしこにまうでなどするところには、このことを申しつくしつれば、今はましてかたかるべきとしよはひになりゆくを、いかで、いやしからんざら人の女子一人とりて、うしろみもせん、ひとりある人をもうちかたらひて、我が命のはてにもあらせんと、この月ごころおもひたちて、これかれにもいひあはすれば、(略) (蜻蛉日記 天禄三年二月 二六一頁)

(8) は、冷泉院に叙爵を願ひ、道綱に元服させてとり行うことは、すべてきまり通りである、と解釈できる場面である。ここでの「ごとし」は、「地の文」で、使用者は「作者」であるから、「男性特有語」ではない。勿論「ごとし」の上接語「れい」が、「元服式」をさし、「男性」と関連すること、は否定できないが、「れい」の意味する、有るべき対象が現前に存する、「指し示す」ものがある、という点においては、

それまでの「ごとし」と共通する。

(9) は、「ごとくに」の用例で、現状が不安で、一人息子によい相手を、と作者が思う場面の一節である。上接する「ただ今」は「現在のようでありさまでは」と解釈でき、この例も「地の文」に表れていることから、作者の今置かれている現場をより「具体的」に指し示すものとして捉えることができる。

枕冊子には、「ごとし」の用例が、1例(「ごとし」終止形)用例が存する。

(10) 系にやあらんと、いそぎとり入れて見れば、餅餠(へいだん)といふ物を二つ並べてつつみたるなりけり。添へたる立文には、解文のやうにて、

進上餅餠一包 例に依て進上如件 別當少納言殿
とて、月日書きて、「みまなのなりゆき」とて、奥に、「このをのこはみづからまぬらむとするを、昼はかたちわるしとてまぬらぬなめり」と、いみじうをかしげに書い給へり。

(枕冊子 一三三段 一八五頁)

(10) は、「立文」即ち書き言葉としての用例で、「ごとし」の上接語は「件(くだん)」となっており、小学館『古語大

辞典等は「くだんのごとし」を「慣用語」と指摘する。これは、(8)「わいのことし」と同質の用法であると考えられるが、このように上接語が特定化する用法も見られ、「日常語に近い」とされる「ことし」の用法中においても、中古仮名文中では、(4)「土佐日記」の「六日。きのふのごとし」。用例のように、「文章語」的語性で用いられていることもあることを指摘しておきたいと思う。

三二一、「漢文訓読語」と所謂「役割語」

ここで、「ことし」の和文中の語性について、さらに見てゆきたい。これまでのことで、中古和文に用いられた「ことし」は、決して、「男性専用語」ではなく、「地の文」にも用いられること、また、比較対象となるものは「具体的に」捉えられること、また、「日常語に近い」用法と地の文の「文章語」的用法の両者が存することを考察した。

中古和文中に用いられた漢文訓読語について、「役割語」の性格について指摘したものに、関「雄(二〇〇五)がある。氏は、漢文訓読語「そもそも」を考察した結果、次のように指摘している。

漢文訓読語とされる「そもそも」は、『源氏物語』では、

二例あるが、北山僧都と夕霧の会話に用いられているので、「漢文の素養のある人物の言葉」として簡単に処理されている。しかし、「そもそも」は、『竹取物語』の竹取の翁の会話に用いられるほか、『土左日記』の作者に付き従う者のそれに使われている。(略)このように、和文に用いられた、いわゆる漢文訓読語は、「漢文の素養のある人物の言葉」という『源氏物語』の用例のみによって、説明されるべきでなく、和文の語りの中で一種の「役割語」としての性格を考えるべきもののようなのである。

右のように氏は、新しい見解を提出したのであるが、「役割語」を提唱した金水敏(二〇〇三)は、「役割語」の指標として、「人称代名詞またはそれに代わる表現」また「文末表現」を挙げており、漢文訓読語「そもそも」がそれに適合するかは、ここでは保留する。が、ここで問題としている「ことし」に関しては、「文末表現形式」として用いられるということを勘案すると、所謂「役割語」的な指標として考察するには、適しているのではないかと考えられる。

また、古代・中世の「役割語」について、金水敏(二〇〇〇)では、「宮廷の女流文学や演劇資料等、古代・中世の資料にも役割語の存在を示している」と見るべき箇所が見えられ

る。「とされているが、基本的には「役割語の発達がめざましいのは、江戸時代以降と考えるべきであらう。」とする見解を述べている。⁽¹⁰⁾

右のような見解を踏まえ、「源氏物語」の「ごとし」を考察する。

三二「源氏物語中の「ごとし」

「源氏物語」における「ごとし」の用法を考察する。源氏物語中に「ごとし」は、9例(「ごとく」7例、「ごとき」1例、「ごとく」1例)用例が存する。

(11) 殿よりは、かのありし返り事をだにのたまはで、日くる経ぬ。このおどしし内舎人といふ者ぞ来たる。げに、いと荒々しくふつつかなるさましたる翁の、声唄れ、さすがにけしきある、(翁)「女房にもとり申さん」と言はせられたれば、右近しもあひたり。(内舎人)「殿に召しはべりしかば、今朝参りはべりて、ただ今なんまかり帰りはんべりつる。雑事ども仰せられつるついでに、かくておはしますほどに、夜半暁のことも、なにがしらかくてさぶらふと思ほして、宿直人わざとさしたてまつらせたまふこともなきを、このごろ聞こし

めせば、女房の御もとに、知らぬ所の人々通ふやうになん聞こしめすことある、たいだいしきことなり、宿直にさぶらふ者どもは、その案内聞きたらん、知らではいかがさぶらふべき、と問はせたまひつるに、承らぬことなれば、なにがしは身の病重くはべりて、宿直仕うまつることは、月ごろ怠りてはべれば、案内もえ知りはんべらず、さるべき男どもは、懈怠なくもよほしさぶらはせはべるを、さのごとき非常の事のさぶらはむをば、いかでか承らぬやうははべらん、となん申させはべりつる。用意してさぶらへ、便なきこともあらば、重く勤当せしめたまふべきよしなん仰せ言はべりつれば、いかなる仰せ言にか、と恐れ申しはんべる」と言ふを聞くに、梟の鳴かんよりも、いともの恐ろし。(浮舟(六)一七五頁)

(12) (僧都)「なにがしはべらん限りは、仕うまつりなん。何か思しわづらふべき。常の世に生ひ出でて、世間の榮華に願ひまつはるる限りなん、ところせく棄てがたく、我も人と思すべかめる。かかる林の中に行ひ勤めたまはん身は、何ごとかは恨めしくも恥づかしくも思すべき。このあらん命は、葉の薄きが如し」と言ひ知らせて、(僧都)「松門に暁到りて月徘徊す」と、法師なれど、いとよしよしく恥づかしげなるさまにてのたまふことどもを、思ふやうにも言ひ聞かせたまふかな、と聞きあたり。(手習(六)三三六頁)

(13) (源氏) 「かの大納言の御むすめ、ものしたまふと聞き
たまへしは。すきずきしき方にはあらで、まめやかに聞こゆる
なり」と、推しあてにのたまへば、(僧都) 「むすめただ一
人はべりし。亡せてこの十余年にやなりはべりぬらん。故大
納言、内裏に奉らむなど、かしこういつきはべりしを、その
本意のごとくもものしはべらで、過ぎはべりにしかば、ただ
この尼君ひとりもあつかひはべりしほどに、いかなる人の
しわざにか、兵部御官なむ、忍びて語らひつきたまへりける
を、もとの北の方、やむごとくなどして、安からぬこと多
くて、明け暮れものを思ひてなん、亡くなりはべりにし。も
の思ひに病づくものと、目に近く見たまへし」など申したま
ふ。

(若紫) (一) (二八七頁)

(14) 大臣は、思ひのままに、籠めたるところおはせぬ本性
に、いとど老の御ひがみさへ添ひたまひにたれば、何ごに
かはとどほりたまはん、ゆくゆくと宮にも愁へきこえたま
ふ。(右大臣) 「かうかうの事なむはべる。この畳紙は右大将
の御手なり。昔も心ゆるされでありそめにける事なれど、人
柄によるつの罪をゆるして、さても見むと言ひはべりしをり
は、心もとどめず、めざましげにもてなされにしかば、安か
らず思ひたまへしかど、さるべきにこそはとて、世にけがれ
たりとも思し棄つまじきを頼みにて、かく本意のごとく奉り

ながら、なほその憚りありて、うけばりたる女御なども言は
せはべらぬをだに、飽かず口惜しう思ひたまふるに、またか
かる事さへはべりければ、さらにいと心うくなむ思ひなりは
べりぬる。男の例とはいひながら、大将もいとけしからぬ御
心なりけり。(略) などのたまふに、宮はいとどしき御心な
れば、いともしき御気色にて、(略)

(賢木) (二) (一三九頁)

(11) の「ことし」は、「げに、いと荒々しくぶつつかなる
さましたる翁の、声唄れ、さすがにけしきある」右近が怖
がるような話をした荒っぽく、どっしりと太った年寄りで、
声はしわがれている「内舎人」の「会話文」中に用いられ
ている用例である。小学館『全集』「頭注」に、「女房のもと
に知らぬ男が忍んでくるというような、の意。貴族の日常語
なら「さやうの」「とでもあるところ」。「ことし」は漢文訓読
語で「懈怠」「非常」などの漢語とともに、いかつい感じで
ある。「との指摘があるが、「敵つい」という表現効果を仮に
「ことし」に認めるとすれば、特定の人物を想定できる「役
割語」といえよう。

(12) の「ことし」は、「僧都」の「会話文」中に用いられ
ており、「白氏文集」巻四「顔色八花ノ如ク命八葉ノ如シ」

という漢詩文に依るのであるから、この場面に表れる必然性は高い。ここでは、これを引用した主体が「僧都」である、ということが、(11)「内舎人」との共通点であり、「役割語」的である。

(13)の「ごとし」は、(12)と同じく「僧都」の「会話文中の用例で、大納言が娘である紫の上を宮中に入内させようという願いが通りにならず、亡くなった、と源氏に答えている場面である。金水氏は、「役割語」の指標として「人称代名詞」をあげているが、(11)の「ごとし」は、「その」(13)の「ごとし」は「その本意の」というように、所謂「指示語」が承接しているのも中古仮名文の特徴であろう。

(14)は、弘徽殿の太后に右大臣が報告し、源氏が窮地に陥る場面の一節である。ここでは、「右大臣」の「会話文中に」「ごとし」が用いられており、『日本古典文学全集』「頭注」には、「右大臣たちのかねてからの希望どおりに。」とあるように、「ごとく」の上接語は、「本意の」であり、(13)や「伊勢物語」(1)の用例と同じである。

(15)御わざなども過ぎて、事ども静まりて、帝もの心細く思したり。この入道の宮の御母後の御世より伝はりて、次々の御祈祷の師にてさぶらひける僧都、故宮にもいとやむこと

なく親しき者に思したりしを、おほやけにも重き御おぼえにて、厳しき御願ども多く立てて、世にかしこき聖なりける、年七十ばかりにて、いまは終りの行ひをせむとて籠りたるが、宮の御事によりて出でたるを、内裏より召しありて常にさぶらはせたまふ。このころは、なほもとのごとく参りさぶらるべきよし、大臣もすすめのためへば、(僧都)「今は夜居などいとたへがたうおぼえはべれど、仰せ言のかしこきにより、古き心ざしを添へて」とてさぶらふに、(略)

(薄雲)二(四三九頁)

(15)は、藤壺の中陰の法要も過ぎ、冷泉院が心細い気持ちであるので、昔ながらの「僧都」を呼んだところ、秘密の大事を奏上するという場面である。ここでの「ごとし」は、「地の文」であり、光源氏が「もとのように」「僧都に参上して、近侍するように勧める」と解釈できる。

(16)二十三日を御としみの日にて、この院は、かく隙間なく集ひたまへる中に、わが御たくしの殿と思す二条院にて、その御設けはせさせたまふ。御装束をはじめおほかたの事どももみなこなたにのみしたまふを、御方々も、さるべき事ども分けつつ望み仕うまつりたまふ。対どもは、人の局々にし

たるを払ひて、殿上人、諸大夫、院司、下人までの設け、いかめしくせさせたまへり。寢殿の放出を、例のしつらひて、螺鈿の椅子立てたり。殿の西の間に、御衣の机十二立てて、夏冬の御装ひ御衾など例のごとく、紫の綾の覆ひどもつるはしく見えわたりにて、内の心はあらはならず。御前に置物の机二つ、唐の地の裾濃の覆ひしたり。(若菜上(四) 八七頁)

(16) は、紫の上が光源氏の四十の賀を主催し、精進落ちの目を決め、その準備を大がかりに行い、そのお召し物、調度品などは「通例によつて」しつらえた場面である。ここで「ごとし」は、「地の文」で、「わが」は、紫の上に即しており、紫の上を軸にして文が叙述されている。したがって、これは、直截的に使用者が男性であるとはいえない用例で、「源氏」以前の、「ごとし」の用法と同一である。

(17) (源氏)「その事となくて、対面もいと久しくなりにけり。月ごろは、いろいろの病者を見あつかひ、心の暇なきほどに、院の御賀のため、ここにものしたまふ皇女の、法事仕うまつりたまふべくありしを、次々とどこほること繁くて、かく年もせめつれば、え思ひのごとくしあへで、型のごとくaなん齋の御鉢まゐるべきを、御賀などいへば、ことごとしb

きやうなれど、家に生ひ出づる童べの数多くなりにけるを御覽せさせむとて、舞など習はしはじめし、その事をだにはたさんとて、拍子ととのへむこと、また誰にかはと思ひめぐらしかねてなむ、月ごろとぶらひものしたまはぬ恨みも棄ててける」とのたまふ御気色の、うらなきやうなるものからいといと恥づかしきに、顔の色違ふらむとおぼえて、御答へもとみにえ聞こえず。(若菜下(四) 二六五頁)

(18) 語らひがたげなる顔して、近う寄りて、(仲人)「月ごろ内の御方に消息聞こえさせたまふを、御ゆるしありて、この月のほどに、と契りきこえさせたまふことはべるを、日をはからひて、いつしか、と思ほすほどに、ある人の申しけるやつ、まことに北の方の御腹にものしたまへど、守の殿の御むすめにはおはせず、君達のおはし通はむに、世の聞こえなんへつらひたるやうならむ、受領の御婿になりたまふかやうの君たちは、ただ私の君のごとく思ひかしづきたてまつり、手に捧げたるごと思ひあつかひ後見たてまつるにかかりてなむ、さるふるまひしたまふ人々ものしたまふめるを、さすがにその御願ひはあながちなるやうにて、をさをさ承けられたまはで、け劣りておはし通はんこと便なかるべきよしをなむ、切に譏り申す人々あまはべるなれば、(略)と言aうに、(略) (東屋(六) 二〇頁)

(17) は、光源氏がようやく参上した柏木に、内心の葛藤を隠し、やさしそうによそおって話す場面である。ここでの「ことし」の使用者は、光源氏で、a「思い通りのことでもできませんので」、b「かたちばかりの（簡略に催す）」と解釈できる。

(18) は「仲人」の会話の中の、「ある人」がいった間接話法の中に「ことし」が用いられており、「主君のようにあがめかすき申し上げる」と解釈できる。

以上の事から、「源氏物語」の「ことし」は確かに「会話文」の使用者は「男性」であり、その意味で言えば「厳めしさ」等を含むことになるのであるが、特定の人物を想定する「役割語」的用法のみでなく、「地の文」の用法も当然あり、「役割語」の定義をそのまま「ことし」に適用できないであろうと考えられる。

四、終わりに

中古和文に用いられた「ことし」を考察した結果、「会話文」中の「ことし」の使用者は「男性」であるが、「地の文」の使用例もあり、決して「男性専用語」ではないこと、使用者は「女童」「僧都」から「光源氏」まで、広範囲に用いら

れること、比較対象となるものは、指し示す「指示性」(この用法は慣用句化)等、具体的に捉えられるものが多いこと、また、「日常語に近い」用法と「文章語」的用法の両者が存することを考察した。また、確かに会話文中のそれは漢文訓読語を用いることで「僧都」のような「登場人物」を特定する「役割語」的用法も存するが、そうでないものもあること、等が明らかになった。

方言国語史的観点からの「比況表現形式」と「希望表現形式」との関係については、別稿を用意しているが、「ことし」「やうなり」等を含めて、他の「比況表現形式」や、史的変遷は今後の課題としたい。

ご教授賜れば、幸いである。

(尚、本文は「源氏物語」は小学館『日本古典文学全集』、その他は岩波書店『日本古典文学大系』に依った。また、必要に応じ、各種索引、注釈書を利用した。)

注

注1 例えば「ことし」を「欠けている実質概念を補足させて、初めて完全な形容詞単位になるところの形容詞つまり形式形容詞」（北原保雄『国語助動詞の研究』）等と捉えることも可能である。

注2 第六章 假名文学と漢文訓讀 第六節 和歌・歌謡と漢文訓讀（六）「ことし」の用法 一七七、八頁

注3 山村明編 明治書院 吉田金彦氏執筆 昭和46

注4 山口明穂・秋本守英編 明治書院 小林賢次氏執筆

注5 ここでは、中国の古伝「月のなかの桂」のように、とあり、「万葉集」湯原王「月のうちの桂のとき（楓如）妹をいかにせむ」（巻四・六三二）が存していることから、『新大系』には、「この段はこうした和歌の異伝あるいは改作によって作られたものか」という指摘もある。

注6 「漢文訓読語と和文語 ― 語りの中での用法 ―」

注7 金水敏（二〇〇三）二〇五頁では、「役割語」を「ある特定の言葉づかい（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くとき特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿、風貌、性格等）を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提供されると、その人物がいかに使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができるとき、その言葉づかいを「役割語」と呼ぶ。」（二〇五頁）とし、また、「話体（スピーチ・スタイル）」であるとも指摘する。

注8 金水敏（二〇〇〇）では、「平安時代の女流文学は、同時代にあつて、流通という点では現代のメディアとは比較にならない規模の小さいものであつたが、作者の役割語意識が表明されていると考えられる。それだけでなく、「更級日記」に見るように、それを受容した読者たちが「法師・男・女・下衆は

こう話すべきもの」と了解し、それを模倣実践さえしたかも知れない。その点では、役割語を育てるメディアの役割を果たした可能性もある。」（三三三頁）と、中古和文に「役割語」の表れていた可能性を指摘する。

また、現代の「役割語」における「西日本型・東日本型の対立」は、山口佳紀「平安時代語の源流について」の、平安時代語の源流（言語体系）が、山城方言の蓋然性が高い、とする仮説を想起させ、日本語史の観点からも大変興味深い。

注9 提唱者の金水氏は、勿論中古仮名文中の漢文訓読語を説明するために「役割語」を定義したわけではなく、「役割語」と中古仮名文中の「漢文訓読語」の関係は、他の和文中の「漢文訓読語」を考察し更に考えたい、と思う。

（参考文献）

築島裕（一九六三）『平安時代の漢文訓読語につきての研究』（昭和38 東京大学出版会）

山口佳紀（一九九三）『古代文体史論考』（有精堂）

金水敏（二〇〇〇）『役割語探求の提案』（『国語論究 国語史の新視点』第8集 佐藤喜代治編 平成12 明治書院）

金水敏（二〇〇三）『ヴァーチャル日本語役割語の謎』岩波書店

関一雄（二〇〇三）『平安時代の表現語彙と読解語彙―文体史研究のあり方試論―』（平成15 『日本文学研究』38 梅光学院大学日本文学会）

関一雄（二〇〇五）『漢文訓読語と和文語 ― 語りの中での用法 ―』（『日本語学』2005・1月号）

（もりわき しげひで・別府大学助教授）